

錦絵新聞に描かれた欧米人

佐々木守俊

はじめに

2代長谷川貞信(1848~1940)は、明治時代の上方浮世絵界を代表する絵師の一人である。幕末には作画を開始し、明治初年の開化絵の時代を生き、90歳を超えてなお『郷土研究 上方』の表紙で健筆をふるうなど、最晩年にいたるまで多岐にわたる画業を展開した。貞信¹は役者絵、名所絵など幅広い画題を手がけたが、なかでも、じっさいの新聞記事にもとづく錦絵新聞は、虚実入り混じったセンセーショナルな題材に加え、短期間に大量の作品が集中的に制作された点でも、その画業を語るうえで避けては通れない、特異な作品群として注目される²。

錦絵新聞は東京・大阪の作品とも、ときに欧米諸国の人々をとりあげた。開港直後に制作された横浜浮世絵にも欧米人の姿はさかんに描かれているが、ニュース性を売り物とする錦絵新聞では、彼らのようすはより生々しく描写され、そこには日本人の好奇のまなざしが顕著にあらわれている。同時に、欧米人と向き合う機会をもった日本人のふるまいも錦絵新聞は伝えている。誇張や曲解が間々あることは否めないものの、それらは明治初年における異文化の接触を図像化した作品としてみのがせない。

欧米人と日本人がくりひろげる事件のうち、とくに人々の関心を煽ったのは、男女の関係にまつわるものではないだろうか。現在の週刊誌と同様、男女間の問題は錦絵新聞で非常に好まれた題材である。本稿では貞信の錦絵新聞のうち、欧米人男性と日本人女性の接触を描く、明治8年(1875)の『大阪新聞錦画』第6号(図1)をとりあげ、扱われている事件の概要と描写の特徴を確認するとともに、当時の世相に目を向けることで、作品のもつ意味を考えてみたい。

1、日本人女性を妾にしようとする欧米人男性

土屋礼子氏は、外国人が登場する錦絵新聞を「異人もの」と分類している³。たとえば、欧米人男性が誤って日本人の子供を猟銃で撃ってしまった事件を描く、貞信筆『大阪錦画新聞』第34号(図2)は、銃の恐ろしさを告発するとともに、欧米各国に領事裁判権が認められていた当時の状況にたいする不公平感もただよわせている。また、中国人男性と日本人女性の結婚を描く、笹木芳瀧(1841~99)筆『勸善懲惡錦画新聞』第47号(図3)⁴は、初期の国際結婚にたいする関心を反映するものといえるが、画中に書き込

¹ 貞信は現在まで5代を数えるが、本稿では以下、「貞信」は2代をさす。

² 土屋礼子『大阪の錦絵新聞』三元社、1995年、原山詠子「明治初期における二代長谷川貞信作品—錦絵新聞を中心に—」(『人文論究』65〈4〉、2016年)。

³ 註2土屋氏書。

⁴ 本作品のように、錦絵新聞には中国人を描く作品も存在する。ただし本稿では、開国によりあらたに日本国内に居住するようになった欧米人の描かれ方に注目し、考察を進める。

まれた記事にはあからさまな好奇のまなざしは感じられず、むしろ2人の結婚を祝うものとなっている。

『大阪新聞錦画』第6号(以下、本作品)は、『勸善懲惡錦画新聞』第47号と同様、外国人男性と日本人女性の接触を描くものである。ただし、男性は中国人ではなく欧米人で、日本人女性に拒絶されるという結末を迎えるのである。『大阪新聞錦画』は絵と記事の双方を貞信が手がけた作品で、『郵便報知新聞』『読売新聞』『東京日日新聞』を出典とし、明治8年(1875)5月から8月ごろにかけて全20点が刊行された⁵。明治8年は貞信の錦絵新聞制作のピークとなった年で、貞信は『大阪新聞錦画』のほか、『大阪錦画新聞』『大阪錦画新話』などの制作にも携わっている。当時の貞信は前名の「小信」を改め、父・初代貞信の名を襲名してまもないことが、「小信改二代貞信画」の落款から判明する。父の名を襲名し、勢いに乗る貞信によって本作品は描かれたのだった。まずは画中に書き込まれた記事⁶を確認しよう。

下谷仲御徒町四丁目／住料理人六兵衛ハ子供が／三人あり親子いたつて睦しく暮して居れど／近頃ハチト献立が間違てすゝみ兼たる飯ト汁／病気の床の看病を娘二人か深切な世話のかひさえ／なくなりて又母おやが病につき二汁五菜の難じうは／ドウ精進の種もなくわずかな稼ぎを身に／引受医者よ薬と辛／き日は少しもいとほぬ／孝行娘を東校御雇外国人がふいと見そめて妾にせんと月に／三十円ヅ、身の代を遣るといへども中々に否とばかりで／承知せずいかにか零落たればとて外国人に見ゆべきと断りました／心の潔白彼やうに心がけ有たい物と読売百十号を見て賞ス

下谷仲御徒町(現在の東京都台東区)の料理人六兵衛には3人の子供があり、家族は仲良く暮らしていた。しかし六兵衛は病気になり、2人の娘は手厚く看病したが、その甲斐もなくなった。さらに母親も病気になり、日々の食事にも難渋することになるが、娘たちはわずかな稼ぎを治療費にあて、辛い日々を厭うことはなかった。そんな娘の姿を大学東校(東京大学医学部の前身)のお雇い外国人が見初め、月に30円の手当で妾にしたいと持ち掛けるが、娘は「どんなに落ちぶれても、外国人の妾にはなりたくない」と断ったという。記事の筆者である貞信は「心の潔白、このように心がけたいものです」と感想を述べるとともに、記事の出典が『読売新聞』第110号であることをあきらかにする。

『読売新聞』第110号は明治8年5月27日の発行で、当該記事は本作品のそれとほぼ同内容であり⁷、貞信が元になった記事をかなり忠実に自作にとり入れていることがわかる。ただし、『読売新聞』は、六兵衛が「養生叶はず昨年暮に果」たことや、東校のお雇い外国人が2人の娘のうち「妹おきん」を見初め、「飼口にいひつけ度々掛合」

⁵ 註2 土屋氏書。

⁶ 翻刻は木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』展図録、東京大学総合研究博物館、1999年、による。

⁷ 筆者は読売新聞社メディア企画局データベース部編『明治の読売新聞』1、読売新聞社メディア企画局データベース部、1999年、を参照した。

ったことを明確に述べる。おきんの断りの文句は「いかに貧乏すればとて金ゆゑ外国人の妾に成るのは否だ」とされている。これにくらべ、貞信の文章は事件の細部の描写がややあいまいだが、全文を七五調にととのえ、戯作文学を思わせる言い回しを多用し、おもしろみを加えている。なお、『読売新聞』の記事は娘の行動にたいし、「どぶか彼やうに心がけたいもので有ります」と感想を述べている。この姿勢は貞信に引き継がれているといつてよい。つまり、本作品は外国人の妾になるのを断った娘を賛美する観点から描かれているのである。では、この記事の内容はいかに絵画化されているだろうか。以下にみてゆきたい。

2、人物描写

本作品の登場人物は東校のお雇い外国人と六兵衛の娘の2人で、錦絵新聞にありがちなどぎつい描写はみられない。その点ではさほど人目を引く作品ではないといえる。背景は青空に白い雲がたなびくのみで、娘の背後に建物の一部が描かれるほか、状況を説明する要素は描かれていない。そのぶん、鑑賞者の視線は画中の2人のふるまいに集中することになる。お雇い外国人はやや手前に配され、洋装で緑色の帽子をかぶり、もみあげを伸ばし、あごひげをたくわえている。左手は紫色の上着のポケットにさし入れ、右手ではステッキを握っていたとみられるが、ステッキは右手から離れて斜めに倒れており、今まさに取り落とした瞬間のようである。画面左方に向かって歩みを進めているが、後方を振り返っており、視線の先には娘が立っている。娘は和装で、陶磁器と思われる筒形の容器を両手で持つ。医者の方へ向かうか、もしくは医者から薬を受け取って帰宅する途次だろうか。『読売新聞』の記事は、「妹おきんが門口に立つて居る処を東校の御雇ひ外国人が見」たとの筋書きだが、貞信の人物描写には、いかにもお雇い外国人が娘を「ふいと見そめ」た感があり、元になった新聞記事を絵師が自身の解釈によって絵画化するプロセスがみてとれる。娘は画面右方に歩を進め、お雇い外国人の存在に気づいたものか、そちらを振り返っているが、ややうつむいており、視線を交わすには至っていないことに注目したい。

両者はいずれも膝を軽く折って腰をかがめ、一方の足を前に踏み出しながら、後方を振り向いている。似通ったポーズをとる男女が背中合わせに配されることで、2人の姿は線対称をなす。ある像とそれを鏡に映したような像とを組み合わせる手法は鏡像関係と呼ばれ、洋の東西を問わず、古くから多くの作例が存在する⁸。鏡像関係の使用により、画中の登場人物は緊密に呼応し、結果として画面には整合性とリズムが生まれる。だが、ここでは画面構成上の効果にとどまらず、鏡像関係の導入によって2人の対照的な人物像がうかびあがっていることも、本作品の特徴といえるだろう。すなわち、男性／女性、欧米人／日本人、洋装／和装、高給を取るお雇い外国人／生活苦に困窮する市井の人物、といった相反する属性を、左右対称に配された2人の姿がより象徴的にあらわしているのである。鳥居清長(1752～1815)の美人画などにみられるように、浮世絵

⁸ 鏡像関係を用いた画面構成については、奥平俊六『絵は語る 10 彦根屏風—無言劇の演出』平凡社、1996年、から多くの示唆を得た。

の世界でも鏡像関係はひんぱんに使用されてきた。貞信もそうした伝統にのっとり鏡像関係を使用したまでも考えうるが、結果として2人の人物描写の差異が強調されていることは事実と認められ、心の動きすらほのめかされているように見受けられる。錦絵新聞にしては派手な描写のない本作品にあつて、こうした配慮は絵の観賞価値を高めるとともに、記事を合わせ読んだ鑑賞者に臨場感や現実味を味わわせるための工夫として評価される。

人物の配置に加え、お雇い外国人がステッキを取り落とすしぐさの描写も、心の動きのあらわれといえるだろう。娘に見とれ、ついステッキを落としてしまったようすを、貞信は描いたものとみられる。錦絵新聞に登場する欧米人男性は、しばしばステッキをもつ姿に描かれる。『勸善懲悪錦画新聞』第16号(図4)や月岡芳年(1839~92)の『郵便報知新聞』第571号(図5)がその例で、後者の登場人物は遊興代を踏み倒して逃げる姿勢をとりながらも、ステッキをしっかりと握って離さない。この2図に加え、さきにふれた『大阪錦画新聞』第34号では、欧米人男性がみな帽子をかぶる姿に描かれている。本作品も同様であり、ステッキとともに帽子が欧米人男性を象徴する小道具として描かれていることがわかる⁹。

さらに、あごひげも象徴的な身体的特徴として注目される。錦絵新聞に描かれる欧米人男性は、みなふさふさとしたあごひげをたくわえている。例外的な作品に、芳瀧の『勸善懲悪錦画新聞』第34号(図6)がある。ここでは、ばつの悪そうな表情でひげのない顔に手を当てる欧米人男性と、それをみて笑う日本人の遊女が描かれる。画中の記事によれば、この男性は伊勢渡会県の山田豊宮崎文庫(現在の三重県伊勢市の旧豊宮崎文庫)に雇われた外国語教師で、遊女に「ムシヤクシヤと髯の有る様を嫌」われるため、みずからひげを剃って日本人と同じ姿になったという¹⁰。また、『読売新聞』第95号(明治8年5月8日)には、「外国人」の妾になるよう口説かれた東京日本橋(現在の東京都中央区)の芸妓が、「私は髯むしやくしやの妾なぞに成る女とハ種が違ひます」¹¹と言い放ったとの記事がみられる。芳瀧の作品と『読売新聞』の記事からは、あごひげが欧米人男性の象徴として認識されていたこととともに、日本人女性にはそれを嫌う傾向があったこともわかる。

本作品に登場するお雇い外国人は、帽子をかぶり、あごひげをたくわえ、ステッキを携帯するという、類型化された欧米人男性の姿に描かれている。絵師の貞信はこの人物を『読売新聞』の記事を通して知るのみだったはずだが、作画においては象徴的な属性を組み合わせることで、いかにもそれらしい姿に描いているのである。ここにあらわれている欧米人男性像は、ステレオタイプとして貞信と鑑賞者の双方に共有されていたのだろう。江戸時代の絵画でも、外国人を総じて他者としての「唐人」と理解し、類型的な造形を与えてきたことが指摘されているが¹²、明治時代の錦絵新聞は、江戸時代にく

⁹ 『勸善懲悪錦画新聞』第16号の解説(註6 東京大学総合研究博物館図録)は、「帽子にステッキ、白いズボンに上着というのが当時の西洋人男性の一般的ないでたちとして受けとめられていたらしい」と述べる。

¹⁰ 註2 土屋氏書。

¹¹ 註7CD-ROM。

¹² 鈴木桂子「浮世絵にみる他者の構築—「唐人」という視点から考える—」(松本郁代・出光佐千

らべはるかに身近となった欧米人の属性を抽出し、あらたなイメージを作り出したのである。

貞信特有の「丸みを帯びた造形による作画」¹³は、お雇い外国人の姿をユーモラスにみせている。画面全体には、これもまた貞信画の特徴である「穏やかな気風」¹⁴がただよい、そこには東京の錦絵新聞で芳年や落合芳幾（1833～1904）が執拗に描いた人間の強い情念や欲望は感じられない。作品を一見する限りでは、ほのぼのとした市井のスケッチのようにも受け取れる。しかし、この作品の背後には、じつは当時の根の深い社会問題が横たわっている。以下、この点についてみてゆきたい。

3、欧米人の娶妾と孝女の図像

黒岩涙香（1862～1920）が暴いたように、明治時代には娶妾が広くおこなわれていた¹⁵。いっぽう、日本にやってきた欧米人男性が日本人女性を妾にする習慣も、シーボルト（1796～1866）の例から知られるように、長崎では開国以前から定着していた。開国後の安政6年（1859）の横浜に港崎遊郭が開かれ、欧米人男性を客とするようになると、遊女を身請けして妾にしようとする客もあらわれる。遊女に限らず、とくに貧しい家の女性には欧米人の妾となる者があった。こうして、妾を使用人として雇用する「傭妾」の制度が広まってゆくが、明治7年（1874）9月12日、太政官は「妾ノ名義ヲ以テ外国人ニ適従スルヲ許サス。但雇人タルハ此限ニ非ス」と通告した。貞信が本作品を描く前年のことである。これをもって傭妾は消滅するが、「雇人」ならばよいとの但し書きは、実質的な傭妾の黙認を意味する。しかし、あくまでも黙認であり、外国人の妾には国内法の妾にかんする規定が適用されないという問題が残った¹⁶。そして、「唐人お吉」のエピソードが如実にものがたるように、外国人の妾は「らしやめん」として蔑視された¹⁷。

欧米人の妾になることにたいする日本人女性の抵抗感をもっともよく示すのが、港崎遊郭の岩亀楼の遊女・亀遊のエピソードである¹⁸。アメリカ人のイルースを客することを楼の主人に請われ、妾になることも促された結果、亀遊が遺書と辞世の歌を残して自決したとの悲話は、現在でも広く知られている。亀遊の伝は、染崎延房（1818～86）著『近世紀聞』2編（明治7年序）¹⁹や、松村春輔（生没年不詳）著『開明小説春雨文

子・彬子女王編『風俗絵画の文化学Ⅱ 虚実をうつす機知』思文閣出版、2012年）。

¹³ 註2原山氏論文。

¹⁴ 註2原山氏論文。

¹⁵ 黒岩涙香『弊風一斑 蓄妾の実例』文元社、2004年（初出は1898年）、森岡清美「明治初期の華族社会における妾」（『淑徳大学社会学部研究紀要』33、1999年）、村上一博「明治民法施行以前の妾と裁判」（同『日本近代婚姻法試論』法律文化社、2003年）。

¹⁶ 竹下修子『国際結婚の社会学』学文社、2000年、嘉本伊都子『国際結婚の誕生 〈文明国日本〉への道』新曜社、2001年。

¹⁷ 吉田常吉『唐人お吉 幕末外交秘史』（『中公新書』94）中央公論社、1966年、註16竹下氏書。

¹⁸ 中田雅敏「近代文学に見る孝子 岩亀楼遊女《亀遊の死》」（『アジア遊学』112、2008年）。

¹⁹ 興津要編『明治文学全集1 明治開化期文学集』筑摩書房、1966年。

庫』上の巻(明治9年序)²⁰におさめられており、挿絵には亀遊の姿も描かれている(図7、8)。2つの亀遊伝が明治7年と9年、すなわち本作品に前後して記されたことには注意しておく必要がある。

2つの亀遊伝に共通するのは、両親が病気になり、困窮した結果、娘を売るという筋立てである。とくに『春雨文庫』では、亀遊は幼いころからかいがいしく両親を看病し、身売りにさいしても両親の病状を案じつつ「自分を売った金でうまいものを食べてほしい」と発言する孝行娘とされている。いっぽう、本作品にみる貞信の記事も、娘が病気の両親を手厚く看病するさまを強調する。つまり、亀遊と本作品に描かれる娘は、孝女である点と欧米人男性の申し出を拒絶した点において共通しており、本作品の記事は悲劇的な結末こそもないものの、全体の枠組みが亀遊伝とよく似ているのである。

江戸時代の日本では、中国前漢時代の『列女伝』や朝鮮李朝時代の『三綱行実図』の影響で、さまざまな女訓書が編まれた²¹。その流れは明治8年の『本朝烈女伝』に至る。これらの書で強調されたのは、忠義・孝行・貞節だった。浮世絵の世界でも、女訓書の枠組みを借りた「列女伝もの」というべき揃物が制作されている。三代歌川豊国(1786～1864)の『古今名婦伝』は代表的な女性像の揃物であり、明治期にも各種の「列女伝もの」が描かれている。とくに芳年の『吾孀絵姿烈女競』は「遊妓喜遊」(明治13年)を含んでおり、そこでは短刀を手にした喜(亀)遊の姿が描かれる。画中の文章は『近世紀聞』の著者・染崎延房によるもので、同書の亀遊伝が「遊妓喜遊」成立のベースになっていることは一目瞭然である。貞信の描く本作品も、このような「列女伝もの」のヴァリエーションとして理解することが可能だろう。

ただし、本作品を成り立たせている重要な要素に、お雇い外国人という新時代ならではの存在があることはみのがせない。少なからざるお雇い外国人が妾をもっていた事実は、この事件を生み出した土壌として注目される。竹下修子氏は、お雇い外国人に長くよい仕事をしてもらうため、雇用者側が日本人女性を紹介していたことを指摘する²²。明治3年ころに起こった「ダラース、リング事件」は、お雇い外国人の娶妾のありさまと、日本人教師がその斡旋をしていた形跡をものがたる。大学南校(東京大学法・文・理学部の前身の一つ)の外国人教師であるダラースとリングは、日本人教員の小泉敦に先導され、リングの妾と連れ立ってダラースの妾の家に向かっていたところ、背後から斬られて負傷した。小泉はダラースとリングに妾を斡旋したことと、負傷した2人を置き去りにしたことを咎められ、免職されたという²³。この事件には、娶妾する欧米人男性への敵視があきらかにあらわれている。ここまでの過激な行動に至らなくとも、同様の意識は明治初年において広く共有されていたものと思われる。傭妾の制度の黙認、2種類の亀遊伝の刊行、貞信による本作品の制作が明治7～9年に集中していることには、おおいに必然性が感じられるのである。

²⁰ 註19書。

²¹ 山崎純一『列女伝 歴史を変えた女たち』五月書房、1991年、岩谷めぐみ『三綱行実図』群の「烈女」篇の成立—朝鮮時代の烈女傳と日本の烈女傳について(『アジア遊学』114、2008年)。

²² 註16竹下氏書。

²³ 梅溪昇『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』(講談社学術文庫)講談社、2007年。

おわりに

ここで、さきにふれた『読売新聞』第95号の記事の全貌をみておきたい。明治8年5月8日に掲載されたこの記事は、貞信が本作品の典故とした同紙の記事をわずかにさかのぼるものであり、本作品の意義を考えるうえで有益な情報をもたらしてくれる。さらに興味深いのは、妾を求める欧米人の申し出にたいし、相反する2通りの結末が示されている点である。

はじめにとりあげられるのは、寺島新田（現在の東京都墨田区）の植木屋の娘にかんする話題である。この娘は向島（現在の東京都墨田区）の料理茶屋で働いていたところ、「或る外国人が妾にせんとて掛け合ひ両親へハ金千円遣る」と申し出た。娘が両親の意向にまかせると答えたため、外国人は両親にじかに掛け合い、両親は千円を受け取って娘を妾に出したという。記事はこの両親と比較するかたちで、外国人から3年で2400円の手当てで妾になるよう相談を持ちかけられた、日本橋の芸妓に話題を移す。芸妓はさきにみたように「私は髻むしやくしやの妾なぞに成る女とハ種が違ひます」とその申し出を拒絶したうえ、「家業こそ賤しいが腹の中ハ奥さまよりか奇麗なものだ」とつけ加えている。記事の筆者は、娘を妾に出した両親にたいしては「親の心が慾ばりて有ると娘の名まで汚れます」と手厳しいが、芸妓の発言は「是でなければ新ぶんやの気にも入りません」と賛美する。同月27日の同紙の記事、そして貞信の絵と記事は後者の視点から書かれていることがわかるが、もし娘がお雇い外国人の申し出を受け入れていたならば、その評価は寺島新田の植木屋夫婦と同様に急落していたのではないだろうか。貞信の描く孝女は、らしやめんとして蔑視される女性の裏返しの存在であることを、『読売新聞』第95号の2つのエピソードは教えてくれる。

本作品は一般的な錦絵新聞のようにドラマティックな筋書きをもつものではないが、親孝行な娘が「心の潔白」を示すという、明治初年の人々の関心をじゅうぶんに煽ったであろう事件を絵画化している。そこには、類型化された欧米人男性に向けられた抵抗感²⁴と、彼の申し出を拒絶する日本人女性への賛美が同居する。孝女にして貞女である娘の姿は、江戸時代以来の「列女伝もの」の浮世絵に通じるものだが、お雇い外国人の娶妾という要素が加わることにより、本作品の主題は錦絵新聞という新時代のメディアにふさわしいものとなったのである。

図版出典

図1・2・4 木下直之・吉見俊哉編『ニュースの誕生 かわら版と新聞錦絵の情報世界』展図録、東京大学総合研究博物館、1999年

図3・6 土屋礼子『大阪の錦絵新聞』三元社、1995年

図5 千葉市美術館編『文明開化の錦絵新聞—東京日々新聞・郵便報知新聞全作品』国書刊行会、2008年

図7・8 興津要編『明治文学全集1 明治開化期文学集』筑摩書房、1966年

²⁴ ただし、『勸善懲惡錦画新聞』第16号では、日本人女性にたいするイギリス人男性の善意を描いており、錦絵新聞における欧米人男性へのまなざしは、つねに抵抗感に満ちていたわけではない。